

博士論文の要約

森 薫(東京未来大学こども心理学部 講師)

I. 論文題目

音楽学習における多元的な知識の動態に関する研究

II. 課題設定

音楽を聴く・演奏するといった行動をしているとき、子どもたちはどのような知識をはたらかせているのだろうか。音楽に関する知識はどのようにもちいられ、またどのようにしてあらたに習得されているのだろうか。

音楽科教育の分野において、音楽科における知識とは、「子どもが音楽から感受する客観的な対象」であり、「どの子どもにとっても認識可能で客観的なものでなければならない」(高須 2007)とされている。この前提に立ったとき、知識として措定されるのは、音楽を特徴づけている要素、楽曲の構成原理、楽曲全体の構成などである。客観的でスタティックな、誰にとっても、どんな状況においても同じ意味内容をもつものが知識として認められ、それを理解・習得するための有効な指導法や授業構成法が検討される。知識に関するこうした見かたは、二元論的知識観といわれるものである。知識を言語や記号であらわされる明示的なもの、普遍的な正しさと客観性をもつものとしてとらえ、個人の主観や個々の状況の影響を受けないものとする見かたである。デカルト以来、認識論を支配し、あらゆる学問の方法をも規定してきたこの知識観は、今日の学校教育においても、なお影響をもっており、音楽科教育においてもそれは例外ではない。

しかし、我々の音楽実践の場面を思い浮かべれば、そこではたらいっているのが二元論的な知識だけではないことは明白である。ヴァイオリン奏者はヴァイオリンの演奏の方法に関する知識をもっているが、これは非言語的な知識であり、演奏するというその行為の中に埋め込まれて手続き的に発現される。また、我々は音楽を聴くとき、無意識のうちに長調・短調の別を聴き分けて直観的に何らかの印象を抱いたり、拍を聴き拍子をとらえたりしているが、ここではたらいっているのも、その大半が非言語的な知識であろう。この種の知識もやはり聴取という行為のなかに発現する。さらに、言語で明示的に表せるが、一般化されない知識もある。たとえば、ある合唱団がコンサートに向けて、どのような曲順でプログラムを組むかを検討する場合、そこでつくられるプログラムのアイデアという知識は、ある合唱団というコミュニティの、1回のコンサートでの音楽表現においてのみ適切性をもつユニークなものである。この種の知識は他の音楽実践においてそのまま使用することはできないが、それをもとに試行錯誤することはありうるというものである。

このように考えていくと、今日の音楽科教育においても根づよく存在している二元論的知識観では、我々の音楽実践においてはたらいっている多様な知識のうちの一部しかとらえられないのではないかという疑問が浮かびあがってくる。二元論的知識観においては知識の称号を与えられず、意味や価値のないものとして捨象さえされてしまうさまざまなタイプの知識のはたらきが、我々の音楽実践を支えているのではないかと考えられるのである。ここに本研究の問題意識がある。本研究は、知識に関する所論を

検討し、それとともに、音楽学習に参加する子どもたちがどのような知識をどのようにもっているのかを、授業の観察調査を通じて詳らかにすることによって、音楽科教育の分野に、二元論的知識観に代わる知識観を提示しようとするものである。音楽学習における知識が実践のなかでいかにはたらき、ときに修正されたりあらたに生成されたりしていくのか、つまり知識の動態を、明らかにしようとするのである。本研究で、子どもたちが音楽学習においてもっているさまざまなタイプの知識、あらたに習得もしくは生成している知識のありようを包括的にとらえ、各種の知識が実践のどのような場面ではたらくのか、相互にどのような連関をもつのかについて明らかにすることによって、音楽学習の実態のみならず、音楽科指導におけるあらたな視座を得ることができると考える。

さて、上段で本研究は「二元論的知識観に代わる知識観」を提示しようとするものであると述べたが、認識論の分野においては、すでにデカルト以来の二元論的知識観に対して、20世紀以降さまざまな疑義が提出されてきている。たとえばプラグマティストたちは、知識は誤りうる・修正されうるものであるという「可謬主義的知識観」を提出した。ジョン・デューイ(John Dewey)はこれを敷衍して「保証づきの言明可能性としての知識」という定義を案出している。デューイはさらに、ひとつの「保証づきの言明」が得られるまでの人々の共同的なプロセスを、「探究の理論」として論述した。また、ギルバート・ライル(Gilbert Ryle)は「技能としての知識」として、マイケル・ポランニー(Michael Polanyi)は「暗黙知」として、身体に結びついた非言語的な知識の存在を指摘している。彼らに共通しているのは、知識が状況依存的で可変的、個人的かつ社会的に構成されるものでもあることの強調である。こうした知識観は、先述したような、我々の音楽実践においてはたらいっている多様な知識を包含しうるものとみることができる。よって、本研究ではこれらの知識観について検討する。

また、認識論の発展を背景として、音楽学や音楽教育哲学の分野でも、1970年代以降に、ジョン・ブラックング(John Blacking)やクリストファー・スモール(Christopher Small)、デイヴィッド・エリオット(David J. Elliott)らが、「音楽」の概念そのものを問い直す所論を発表してきている。彼らの論においては、それまでの西洋クラシック音楽第一主義が忌避されている。音楽は、人々特別な才能の持ち主に限らないすべての人々による種々雑多な行為であり、その集積としての実践であると位置づけられている(Blacking 1974; Small 1985; Elliott 1995)。そこでは、先述したような言語化のしにくい知識、感情をともなう直観的な知識、身体に結びついた知識、さらに、各実践の固有の状況に埋め込まれた知識、たとえば価値観や各音楽ジャンルや各コミュニティにおいて共有されている伝統・規範といった類の知識への言及がなされている。とりわけエリオットは、人間の音楽実践には4種ないし8種の多様な知識がもちいられていることを述べている。小学校音楽科における子どもたちの、学習について考察していく本研究においては、これら音楽学・音楽教育哲学の所論についても詳細に検討し、それを理論的枠組みにもちいながら子どもの発話や行為を読み解くことによって、これからの音楽科教育への示唆を探っていく。

もうひとつ、本研究が問題意識を向けるのは、子どもたちが音楽学習においてもっている知識には、教師の側が習得を望む、教育内容としてのそれらとは別に、子どもたちが子どもたちのやりかたでもっている知識が多様にあるのではないかということである。いいかえれば、冒頭で挙げた音楽を特徴づけている要素、楽曲の構成原理など、音楽作品に直接関わっているものだけでなく、授業という場において求められるふるまい、友人との関係性やそれに基づく相互作用といったさまざまなリソースがあるのではないかということである。とかく、音楽科教育の分野においては、何を教えるべきかが論じられ

がちであり、子どもたちが何を学んでいるか、彼らが既有的いかなる知識をもちいているかには焦点があてられづらかった。本研究では、認識論の理論的考察とあわせて、学習論について検討し、とくに1980年代以降に提出されてきた状況的学習論の視点と方法を援用する。先に述べた、理論的枠組みをもちいて子どもたちの学習のありようを詳らかにする方法としては、マイクロ・エスノグラフィを適用する。なお、状況的学習論やエスノグラフィも、20世紀以降の認識論におけるドラスティックな転換を背景に提示されてきた学習観であり、研究方法論である。

以上のように本研究は、20世紀以降に提出された認識論やそれに基づく学習論、音楽学、音楽教育哲学の所論を参照しつつ、マイクロ・エスノグラフィの手法をもちいて子どもたちの音楽学習における多元的な知識の動態を明らかにしようとするものである。4つの小目的について、以下に改めて記す。

- i) そもそも知識とはいかなるものかについて、認識論の知見を踏まえた検討をおこない、音楽実践における知識をどのように措定すべきかについて明らかにすること
- ii) 人々が知識をもちいて展開していく過程であり、またあらたな知識を何らかのかたちで得ていく過程である学習という営みについて検討し、音楽学習研究をおこなううえで適切な学習観について考察すること
- iii) 音楽実践における知識にはどのようなタイプのものがあるのか、その諸相について、音楽教育哲学の先行研究をもとに検討・考察すること
- iv) 音楽学習において、参加する成員が既有的知識をどのようにもちいているのか、他の成員とどのように相互作用しながらあらたな知識を生成したり、既有的知識を修正・更新したりしていくのかについて検討・考察し、音楽学習における多元的な知識の動態を明らかにすること

Ⅲ. 論文の構成

本研究は、序章・終章を含めた8章から構成されており、構造は以下に示す図のようになっている。

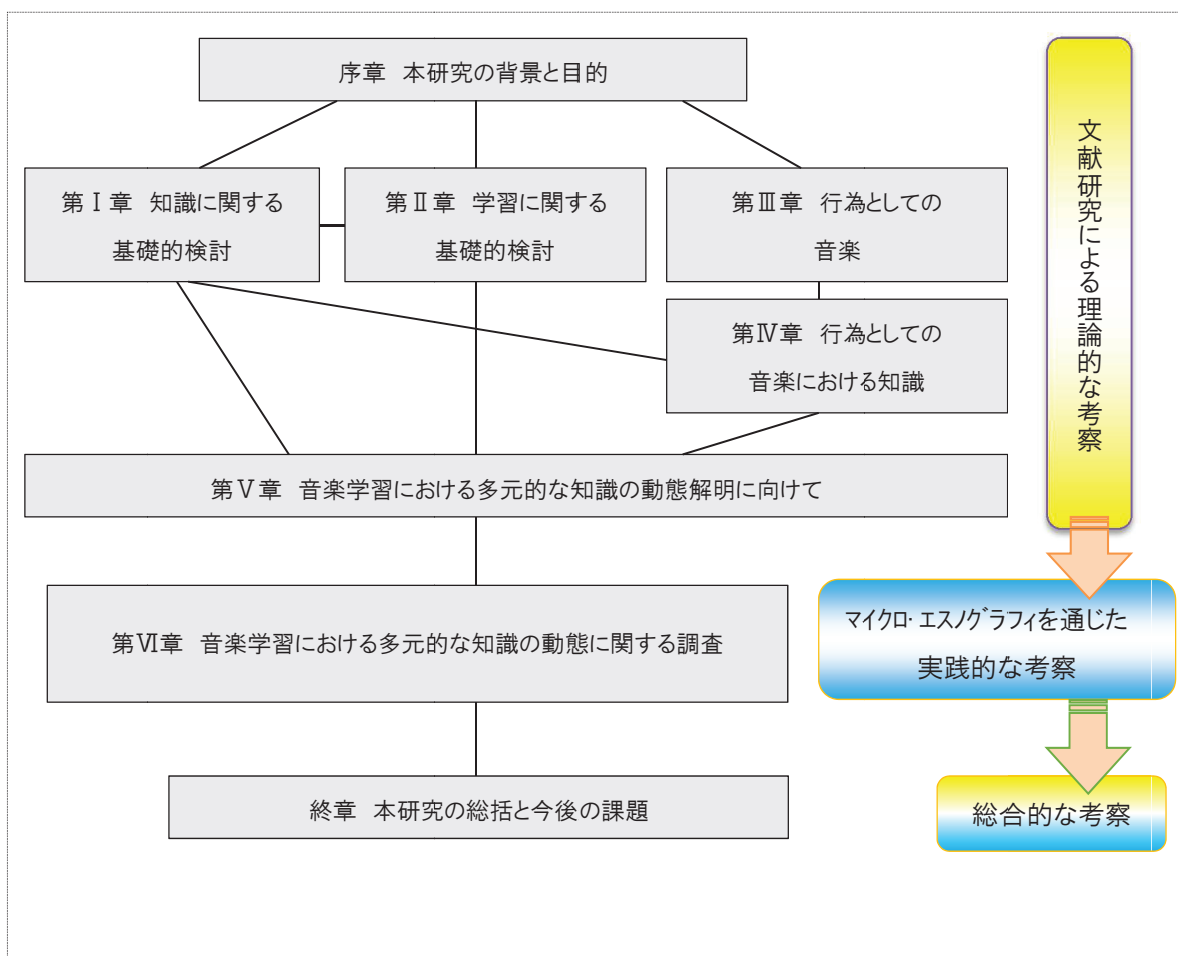


図 1 論文の構造と方法

【論文構成】

序章 本研究の背景と目的 (pp.1-30)

第1節 本研究の背景 (pp.2-23)

第1項 多様な知識観

第2項 教育学における知識の問題

1. 知識研究の必要性
2. 教育からみた知識

第3項 音楽教育学における知識の位置づけ

1. 先行研究にみられる知識観
2. アメリカ音楽教育論争における知識観と学習観
3. 戦後の音楽科教育内容論における知識観と学習観

第4項 音楽教育学と知識をめぐる課題の整理

1. 二元論的知識観への偏重

- 2. 知識の相互関連の未検討
- 3. 学習者の視点の欠如
- 第2節 本研究の主題・目的・方法 (pp.24-30)
 - 第1項 研究の目的
 - 第2項 研究の方法

- 第I章 知識に関する基礎的検討 (pp.31-71)
 - 第1節 伝統的な認識論における知識観 (pp.32-40)
 - 第1項 日常語としての「知識」
 - 第2項 「正当化された真なる信念」としての知識
 - 第3項 心身二元論に基づく知識
 - 第4項 二元論的知識観の特徴と問題点
 - 1. 明示的な知識への偏重と行為の捨象
 - 2. 知識の客観主義・個人主義
 - 第2節 プラグマティズムの知識観 (pp.41-56)
 - 第1項 プラグマティズムの系譜
 - 1. 「プラグマティズム」の語の誕生
 - 2. ジェイムズの講演における宣言
 - 3. クロインの論文発表
 - 第2項 方法論としてのプラグマティズム
 - 1. パースによるデカルト批判
 - 2. 認識能力についての新たな視点
 - 3. 「実際の懐疑」がもたらす探究
 - 4. 可謬主義的知識観
 - 第3項 真理論としてのプラグマティズム
 - 1. 「信じる意志」と知識
 - 2. ジェイムズにおける真理概念
 - 3. 事実と価値の二分法の打破
 - 第4項 音楽学習研究への示唆
 - 1. 音楽の知識とプラグマティズムの知識観の適合性
 - 2. 学習者による共同的な探究への着目
 - 第3節 ジョン・デューイの知識論 (pp.57-75)
 - 第1項 デューイの二元論批判
 - 1. 二元論への疑い
 - 2. 二元論に対する批判
 - 第2項 デューイの知識観
 - 1. 保証づきの言明可能性としての知識
 - 2. 知識を支える習慣と探究のサイクル

3. 動態としての知識
4. 探究における言語の重要性

第3項 デューイ知識論の発展

1. マイケル・ポランニーの「暗黙知」理論
2. ドナルド・ショーンの「反省的実践家」理論

第4項 音楽学習研究への示唆

1. 音楽実践における習慣と探究
2. 音楽実践における知識
3. 音楽実践における相互作用と知識の使用

第II章 学習に関する基礎的検討 (pp.76-125)

第1節 学習論の系譜 (pp.77-86)

第1項 行動主義的学習観

第2項 認知主義的学習観

第3項 構成主義的学習観

第4項 社会構成主義的学習観

1. 意味の共同生成過程としての学習
2. 共同生成し分かち合うものとしての知識
3. コミュニケーションの媒介としての言語
4. コミュニケーションの器官としての身体

第2節 ジョン・デューイの学習論 (pp.87-103)

第1項 探究としての学習

1. デューイの学習観
2. 探究の定義

第2項 探究を構成するフェーズ

1. 不確定の状況
2. 問題の設定
3. 問題解決の決定
4. 推理
5. 行動による仮説の検証
6. 確定した状況

第3項 探究としての学習における相互作用

1. 環境との相互作用
2. 他者との相互作用

第4項 デューイの学習論と音楽学習研究

1. 探究の理論に依拠した先行研究
2. 先行研究にみられる課題

第5項 デューイの学習論における課題

1. 完遂されない探究の可能性
2. 知る過程と知識の一体化

第3節 状況的学習論 (pp.104-125)

第1項 状況的学習への着目

1. 学校学習への批判
2. 学習の状況性への関心
3. 正統的周辺参加概念の措定

第2項 状況的学習を構成する要因

1. 実践
2. 実践のコミュニティ
3. 参加とアクセス

第3項 状況的学習論における知識

1. 状況に埋め込まれた知識
2. 関係論的な知識
3. 再生産される知識

第4項 状況的学習論と音楽学習研究

1. 状況的学習の描出
2. 状況的学習論を適用した音楽学習研究
3. 先行研究にみられる課題
4. 音楽を行為としてみる意義

第Ⅲ章 行為としての音楽 (pp.126-159)

第1節 ブラックキングの音楽論 (pp.127-132)

第1項 音楽学への批判

1. 西洋音楽中心主義への批判
2. 客観主義・音響主義への批判
3. エリート主義への批判

第2項 社会的ファクターの導入

1. 相互作用
2. 社会・文化的コンテクスト

第3項 音楽と身体結びつきへの着目

1. 西洋音楽における脱身体性
2. 身体的経験としての音楽

第4項 音楽学習研究への示唆

第2節 スモールの musicking 論 (pp.133-140)

第1項 音楽学への批判

1. musicking 概念の案出
2. 音楽のモノ性への疑念

- 第2項 musicking 論の概要と射程
 - 1. 人々の行為としての音楽
 - 2. 音楽を生みだす社会・文化的コンテクスト
- 第3項 musicking 論における身体
 - 1. 有機体による環境の構成
 - 2. 身振りの言語の優位性
 - 3. 身体的位置づけに関する課題
- 第4項 音楽学習研究への示唆
 - 第3節 エリオットの musicing 論 (pp.141-152)
 - 第1項 音楽教育学への批判
 - 1. リーマーの MEAE 論
 - 2. エリオットによる MEAE 批判
 - 第2項 musicing 論の概要と射程
 - 1. musicing の定義
 - 2. musicing を構成する次元
 - 第3項 musicing 論における身体
 - 1. パーソンフッドの概念
 - 2. 心身一元論的な身体
 - 第4節 musicking 論と musicing 論の関わり (pp.153-159)
 - 第1項 2つのミュージッキング論の変遷
 - 第2項 2つのミュージッキング論の異同
 - 1. 共通点
 - 2. 相違点
- 第IV章 行為としての音楽における知識 (pp.160-198)
 - 第1節 エリオットによる「音楽の知識」論 (pp.161-168)
 - 第1項 MM1における知識観
 - 第2項 フォーマルな音楽の知識
 - 第3項 インフォーマルな音楽の知識
 - 第4項 印象的な音楽の知識
 - 第5項 監督的な音楽の知識
 - 第2節 エリオットによる「音楽の思考・知」論 (pp.169-180)
 - 第1項 MM2における知識観
 - 第2項 手続き的な音楽の思考・知
 - 第3項 言語的な音楽の思考・知
 - 第4項 経験的な音楽の思考・知
 - 第5項 状況的な音楽の思考・知
 - 第6項 直観的な音楽の思考・知

第7項 価値発見的な思考・知

第8項 倫理的な音楽の思考・知

第9項 監督的な音楽の思考・知

第3節 音楽の知識の解明に向けて (pp.181-191)

第1項 エリオットの知識論の意義

1. 「音楽の知識」論の意義
2. 「音楽の思考・知」論の意義

第2項 エリオットの知識論の課題

1. 知識の類型と性質の混濁
2. 各類型間の相互関連の不明
3. 人々の相互作用と知識の発現
4. 言語的な音楽の思考・知の位置づけ
5. 社会・文化的コンテクストの見かた
6. 音楽の思考・知と身体の間わり

第3項 音楽における知識の解明に向けた視点

1. 音楽の思考・知の変容と相互関連
2. 共同的達成としての音楽実践
3. 実践のコンテクスト
4. 音楽の思考・知の発現

第V章 音楽学習における多元的な知識の動態解明に向けて (pp.192-202)

第1節 本研究における音楽学習 (pp.193-196)

第1項 本研究における音楽のとらえかた

第2項 本研究における学習のとらえかた

1. デューイの学習論
2. 状況的学習論

第2節 本研究における知識 (pp.197-202)

第1項 本研究における知識のとらえかた

1. 保証づきの言明可能性としての知識
2. 習慣と探究の連続性
3. 状況的学習論における知識

第2項 エリオットによる「音楽の思考・知」論の援用

1. 「知識」概念の使用
2. 6類型の援用・1類型の指定

第VI章 音楽学習における多元的な知識の動態に関する調査 (pp.203-310)

第1節 調査の方法 (pp.204-221)

第1項 調査の目的

第2項 調査・分析の方法

1. 解釈的アプローチ
2. マイクロ・エスノグラフィの方法
3. 音楽教育学におけるマイクロ・エスノグラフィックな先行研究

第3項 調査の視点

1. 知識の主体としての子ども
2. 子どもたちの相互作用
3. 授業への参加としての学習

第4項 調査を構成する手法

1. 参与観察
2. 質問紙調査
3. 半構造化インタビュー

第2節 調査の概要 (pp.222-240)

第1項 調査の対象

1. 調査対象校の沿革と特徴
2. 調査対象者

第2項 調査の期間と経過

1. 調査期間
2. 授業観察の経過
3. 音楽科の授業を構成する活動

第3節 習慣的な行為・発話と音楽の知識 (pp.241-261)

第1項 音楽室への入室から授業開始まで

1. 自発的なうた
2. 板書や掲示物に対するはたらきかけ

第2項 歌唱活動

1. 発声練習
2. 範唱やCDの聴取
3. 歌唱
4. 歌唱終了後

第3項 器楽活動

1. ソプラノ・リコーダーの活動
2. 鍵盤ハーモニカの活動
3. 合奏の活動

第4項 鑑賞活動

1. 教師による題材の提示
2. CDやDVDの鑑賞
3. 聴取後の感想

第5項 授業終了から退室まで

第6項 習慣的な行為の意味と特徴

1. 習慣的な行為の状況性
2. 習慣的な行為の個人性
3. 習慣的な行為の機能

第7項 習慣的な行為にみる多元的な音楽の知識

1. 習慣的な行為を支える経験的な音楽の知識
2. 可視的な行為と行動的な音楽の知識

第4節 発話を中心とした相互作用と音楽の知識 (pp.262-283)

第1項 子どもの発話を契機とした相互作用

1. 自発的な発話の生起
2. 発話と行為の連鎖
3. 楽曲への共同的な働きかけ

第2項 教師の発話を契機とした相互作用

第3項 発話を中心とした相互作用にみる多元的な音楽の知識

1. 各種の音楽の知識の発現としての言語的な音楽の知識
2. 違和感とともにたらく直観的な音楽の知識
3. 発話のスタイル・内容を規定する倫理的な音楽の知識
4. 発話の相互作用によって発現する行動的な音楽の知識
5. 他種の音楽の知識の源泉となる経験的な音楽の知識

第5節 行為を中心とした相互作用と音楽の知識 (pp.284-293)

第1項 子どもの行為を中心とした相互作用

1. 同調する行為
2. 行為への意味付与
3. モデリングによる行為の変化

第2項 行為を中心とした相互作用の特徴

1. 多層性
2. 多義性
3. 展開のはやさ

第3項 行為を中心とした相互作用にみる多元的な音楽の知識

1. 他種の知識の源泉としての経験的な音楽の知識
2. 多義的である行動的な音楽の知識
3. 実践のコミュニティのコンテキストから生じる倫理的な音楽の知識
4. 他者の行為を参照してはたらくメタ認知的な音楽の知識

第6節 探究と音楽の知識 (pp.294-310)

第1項 発話と行為による相互作用

第2項 探究の理論をふまえた発話・行為の検討

1. 不確定な状況
2. 問題の設定

3. 問題解決の決定
4. 推理
5. 行動による仮説の検証
6. 確定した状況

第3項 探究にみる多元的な音楽の知識

1. 他種の知識の源泉としての経験的な音楽の知識
2. 探究の契機となる直観的な音楽の知識
3. 言語的な音楽の知識の一種としての音楽的概念
4. 探究を推進させる価値発見的な知識

終章 本研究の総括と今後の課題 (pp.311-331)

第1節 各章の総括 (pp.312-328)

第1項 第I章：知識に関する基礎的検討

1. 二元論的知識観とその問題
2. プラグマティズムの知識観
3. ジョン・デューイの知識観

第2項 第II章：学習についての基礎的検討

1. 学習論の系譜
2. ジョン・デューイの学習論
3. 状況的学習論

第3項 第III章：行為としての音楽

1. ジョン・ブラッキングの音楽論
2. クリストファー・スモールの musicking 論
3. デイヴィッド・エリオットの musicing 論
4. musicking 論と musicing 論の異同

第4項 第IV章：行為としての音楽における知識

1. 8タイプの多元的な音楽の思考・知
2. エリオットの論における課題

第5項 第V章：音楽学習における多元的な知識の動態解明に向けて

第6項 第VI章：音楽学習における多元的な知識の動態に関する調査

1. 相互作用のスタイル
2. 多元的な音楽の知識の各類型と相互の関係性

第2節 成果と今後の課題 (pp.329-331)

第1項 成果と意義

1. 音楽の知識の理論的検討
2. 音楽学習における多元的な知識の動態の描出

第2項 今後の課題

1. 技能としての知識

2. 子どもたちの発話と行為に含まれるユーモア
3. 多面的な音楽の知識と学習者の学年・校種との関連性

引用文献一覧 (pp.332-340)

謝辞 (pp.341-342)

IV. 各章の概要

序章 本研究の背景と目的

序章ではまず、教育学において知識の問題がどのように論じられてきたのかを、イスラエル・シェフラー(Israel Scheffler 1978)やネル・ノディングス(Nel Noddings 1998)の研究をもとに整理し、教育の視点から知識の問題を検討することが必要と考えられる根拠を述べた。また、日本の音楽教育学の先行研究において二元論的な知識観が想定されてきたことを指摘し、そこにどのような問題があったのかについて考察した。

さらに、アメリカの音楽教育哲学分野において 1990 年代に生じた、ベネット・リーマー(Bennett Reimer)とエリオットを中心とする「MEAE(Music Education as Aesthetic Education)派對プラクシス(praxis)派」の論争を取り上げ、音楽における知識の問題が両者によってどのように主張されたのかを検討した。前者においては音楽的概念(musical concept)が最重要の知識として措定された(Reimer 1970)。一方後者においては、4 タイプの音楽の知識(Elliott 1995)、もしくは 8 タイプの音楽の思考・知(Elliott, et al. 2015)の多面的な知識モデルが示されていた。

序章における先行研究の検討の最後に、日本における教育内容論争についても検討した。千成俊夫らの研究グループがリーマーらを踏まえて音楽科における教育内容を論じていくなかで、徐々に倫理的・美的規範としての知識やメタ知識を、その範疇に入れようとしていたことを指摘した。さらに 2000 年代に入ると、日本の音楽教育における授業構成論に社会構成主義的な学習観が適用され、学習者自身が生成する知識への積極的な着目がなされるようになってきたことも概観した。

以上の論述を経て、序章の最後に論文の構成や研究の方法を示している。

第 I 章 知識に関する基礎的検討

第 I 章ではまず、伝統的な心身二元論的知識観がどのようにして成立したのか、そこにいかなる問題があるのかについて整理した。二元論的知識観が学校教育にもたらした大きな 2 つの問題として、知識の「個人主義」「客観主義」があることを指摘した。

その上で、二元論的知識観の乗り越えを企図して打ち出された 20 世紀以降の比較的あたらしい認識論のなかからプラグマティズムを取り上げ、そこで提示された「可謬主義的知識観(fallibilism)」について検討し、その有用性について述べた。また、チャールズ・サンダース・パース(Charles Sanders Peirce)が展開した「方法論としてのプラグマティズム」や、ウィリアム・ジェイムズ(William James)が発展させた「真理論としてのプラグマティズム」などの系譜についても整理をおこなっている。

さらにこの章では、プラグマティズムの代表的な哲学者で教育学者でもあるジョン・デューイの知識観について詳細に取り上げて検討していった。デューイは「保証づきの言明可能性(warranted assertibility)」という独特の知識の定義を案出したが、この定義による彼の知識論には、「知識を支える

習慣と探究のサイクル」「動態としての知識」「探究における言語の重要性」という特徴が含まれていることを指摘した。デューイは、あらたな知識を生成するまでの一連のプロセスを「探究(inquiry)」として、探究をうみだす源泉を「習慣(habit)」としてそれぞれ位置づけたが、それについても彼の論考を検討・整理した。最後に、デューイのこうした知識観が、音楽実践に適合するものであることを論証したうえで、音楽学習研究にどのような示唆を与えるのかについても考察した。

第Ⅱ章 学習に関する基礎的検討

第Ⅱ章では、まず学習論の系譜を概観し、行動主義的学習観、認知主義的学習観、社会構成主義学習観のそれぞれの特徴について整理した。各学習観において、学習者の身体やコミュニティの問題がどのように位置づけられてきたのかを検討したうえで、音楽学習研究に適合した学習観は、社会構成主義的学習観であることを導出した。

つづいて、社会構成主義的学習観の源流の1つとなっているデューイの学習論を取り上げた。第Ⅰ章でも述べた探究の理論を軸に、行為、美的経験といったキーワードから紐解いた。さらに、デューイの学習論を援用した音楽教育分野の先行研究についても検討をおこなっている。先行研究においては、本来6フェーズから構成されるデューイの探究の理論を雑駁に援用しているものが目立ち、また、デューイが重要性を強調していた習慣のはたらきへの視点が欠けていることが明らかとなった。

デューイの学習論をふまえて子どもたちの音楽学習をとらえるにあたっては、旧来型の教授-学習モデルではなく、学習者の視点からそのプロセスを詳らかにしていく必要がある。しかしデューイ自身はそのための道具立てを提供しているわけではない。そこで第Ⅱ章の最後に、学習者である子どもたちの発話や行為、それらが織りなす相互作用を観察・分析するための視座を得ることを企図し、状況的学習論の検討をおこなった。状況的学習論は、社会構成主義的学習論を背景として1990年代から発展してきたものである。

状況的学習論における学習とは、実践のコミュニティへの参加とその深まりとして定義される。本論ではそうした学習を構成する要因である、「実践」「実践のコミュニティ」「参加とアクセス」についてどのように捉えるべきかを整理した。また、状況的学習論における知識観がデューイの知識観と共通する志向性をもつことも確認した。さらに、状況的学習論を援用した音楽学習の先行研究を検討し、そこにある問題点を明らかにした。問題点としては、「会話の切片化による文脈と複雑性の捨象」、「指導者の発話への偏重」、「行為の捨象」、「一般的な授業からの乖離」の4点が抽出された。本研究がこれらの問題点の克服を目指すものであることを章末に述べた。

第Ⅲ章 行為としての音楽

1970年代まで、西洋クラシック音楽の分野において、音楽といえば楽譜に記された作品やそれを演奏した際の鳴り響く音を指すことが一般的であった。いわば「音楽=作品」の音楽観である。しかし、第Ⅰ章で取り上げた認識論の分野におけるパラダイム転換は他の分野にも波及し、それは音楽学や文化人類学においても例外ではなかった。そうした中で生まれたのが「音楽=行為」の音楽観であり、「ミュージック(music)」を動詞と捉えて動名詞化した「ミュージッキング(スモールにおいては musicking, エリオットにおいては musicing)」の概念である。第Ⅰ章・第Ⅱ章の論究をふまえ、本研究ではこの、行為としての音楽という見方を採用している。第Ⅲ章は、この音楽観について論じた章である。

まず、音楽を行為として捉える立場を採った最初の論として、イギリスの民俗音楽学者ブラッキングの論を取り上げ、彼の論において音楽実践における成員の相互作用、社会・文化的コンテクスト、身体性がどのように言及されているのかを検討した。またこれを引き継いで展開された、ニュージーランド出身の音楽学者スモールの「ミュージッキング(musicking)」論を検討し、彼の音楽教育学に関する言及を抽出、音楽学習研究への示唆を考察した。一方で、スモールによる「身ぶりの言語」についての論には、彼のミュージッキング論全体の趣旨と相反する本質主義的な記述が含まれており、批判の余地があるとの見かたを示した。つづいて、音楽教育哲学者のエリオットが展開した「ミュージッキング(musicing)」論を検討した。彼が、師でもあった音楽教育哲学者リーマーに対しておこなった批判や、彼の論において述べられている心身一元論的な身体観について整理した。

この章の最後に、スモールとエリオットの論を比較し、共通点と相違点について整理した。2者の論には、発音は同じ「ミュージッキング」の名が冠されているものの、スペルは上述のように異なっており、論の内容にも相異がある。にもかかわらず、日本の先行研究においては同一視されているきらいがあった。そこで、この章では詳細に彼らの論を比較・検討し、両者を検証したアメリカの音楽教育哲学の論考についても検討している。その結果2者の論の異同が明らかとなり、さらにスモールがエリオットに対し、批判的な言及をおこなっていた事実を見出すことができた。

両者の共通点としては「音楽を行為であるとした点」「演奏や聴取だけでなく、パフォーマンスに関わる全ての行為を音楽とした点」「音楽に関わる身体のはたらきに重要性を見出した点」「音楽の行為や活動が展開される社会、文化的なコンテクストを重要視した点」「西洋音楽等、特定の音楽文化における価値体系を絶対的なものとししない点」が挙げられる。一方で相違点としては、「身体の位置づけと強調点」「社会・文化的コンテクストにおける強調点」が抽出された。なお本研究では、これらの相違点のうち、前者についてはエリオットに、後者においてはスモールに論の優位性があることを指摘した。

第IV章 行為としての音楽における知識

この章では、エリオットの musicing 論において展開された「音楽の知識(musical knowledge)」「音楽の思考・知(musical thinking and knowing)」に関する論を詳細に検討した。本研究では音楽学習における多元的な知識の動態について扱うが、行為とその集積である実践としての音楽における知識の問題について、詳細な論を展開し、また類型化を試みた論者はエリオットをおいてほかにはみられないからである。

エリオットは1995年に『音楽の問題(原題：“*Music Matters*”、邦訳未公刊)』初版を発表したが、ここで先述の MEAE 批判をおこない、4タイプの多元的な知識が関わる手続き的な過程として音楽実践を論じた。この4タイプの知識とは、「フォーマルな音楽の知識(formal musical knowledge)」「インフォーマルな音楽の知識(informal musical knowledge)」「印象的な音楽の知識(impressionistic musical knowledge)」「監督的な音楽の知識(supervisory musical knowledge)」である。まずこの4つのタイプの音楽の知識について、性質や特徴を整理した。

また、エリオットは初版発表から20年を経て、2015年にマリッサ・シルヴァーマン(Marissa Silverman)を迎え、大幅改訂した『音楽の問題 第2版(原題：“*Music Matters 2nd edition*”)』を発表している。第2版では、MEAE 批判を超え、エリオットら自身の音楽教育哲学を自立したものとして構築しようとする姿勢が貫かれている。音楽の知識に関する論も大きく変化し、音楽の知識ではなく、音楽

の思考・知(musical thinking and knowing)の概念がもちいられ、タイプも8つのものが示されている。それは「手続き的な音楽の思考・知(procedural musical thinking and knowing)」「言語的な音楽の思考・知(verbal musical thinking and knowing)」「経験的な音楽の思考・知(experiential musical thinking and knowing)」「状況的な音楽の思考・知(situated musical thinking and knowing)」「直観的な音楽の思考・知(intuitive musical thinking and knowing)」「価値発見的な思考・知(appreciative thinking and knowing)」「倫理的な音楽の思考・知(ethical musical thinking and knowing)」「監督的な音楽の思考・知(supervisory musical thinking and knowing)」であった。本章では各類型の性質と特徴について検討をおこなった他、初版から第2版にかけての改訂のポイントについても整理している。

この章の最後に、エリオットによる音楽の知識論の功績と課題について検討した。功績は、音楽実践と結びついたコンテクストにともなう思考・知の存在や身体に結びついた知の存在に積極的に意味を見出し、それらを視野にいれた音楽教育の構想を提言した点にある。一方で、それぞれのタイプの知識の相互関連、成員同士の相互作用とそこでの知識発現のフェーズ、言語的な知識や思考・知の様相、コンテクストと身体的位置づけのしかたについては、検討不足もしくは検討がなされていないという問題点が抽出された。

第V章 音楽学習における多元的な知識の動態解明に向けて

この章では、第I章から第IV章にかけておこなった、認識論、学習論、音楽学、音楽教育哲学の先行研究の検討をふまえて、本研究において音楽、学習、そして知識をどのように捉えるのかについて、あらためて振り返り、整理した。その整理を通じて本研究の関心と目的を明確化し、第VI章以降のマイクロ・エスノグラフィにおいて何に視点を置き、何を明らかにしようとするのかについて述べた。

また、子どもたちの音楽学習における多元的な知識の動態を明らかにするにあたって、使用する知識の類型を、以下の6タイプとすることを示した。

- ・ 言語的な音楽の知識 (verbal musical knowledge)
- ・ 経験的な音楽の知識 (experiential musical knowledge)
- ・ 直観的な音楽の知識 (intuitional musical knowledge)
- ・ 価値発見的な知識 (appreciative knowledge)
- ・ 倫理的な音楽の知識 (ethical musical knowledge)
- ・ メタ認知的な音楽の知識 (metacognitive musical knowledge)

「手続き的な音楽の思考・知」と「状況的な音楽の思考・知」については、エリオット自身がすべてのタイプの音楽の思考・知に共通する性質であるとして論じているものである。また、状況的学習論やデューイの学習論、知識論、さらにエリオット自身の *musicing* 論に照らせば、実践はすべて特定の状況から立ち上がってくるコンテクストも含めた営みであり、もちいられる知識も、すべて特定の状況に埋め込まれて、手続き的にもちいられるものである。そこで本研究の調査においては上記2タイプを、知識の「類型」からは除外している。また、「監督的な音楽の思考・知」については、エリオット自身が換言している「メタ認知的な」という表現のほうの内実を適切に示していると考えられたため、そちらを類型名にもちいた。第VI章のマイクロ・エスノグラフィを通じて措置の必要性が見出された類型である「行動的な音楽の知識 (behavioral musical knowledge)」についてもここで提示している。

第Ⅵ章 音楽学習における多面的な知識の動態に関する調査

この章は、2015年4月から2016年3月にかけて継続的に実施した小学校3年生の音楽科授業に対する観察を中心とした、マイクロ・エスノグラフィである。はじめに、音楽学習研究にはこれまであまりもちいられてこなかったマイクロ・エスノグラフィの方法と、そのメタ理論である解釈的アプローチについて、発達心理学の分野における先行研究を参照しつつ概観した。そのうえで、本研究の調査では、「知識の主体としての子ども」「子どもたちの相互作用」「授業への参加としての学習」の3つに視点に立つことを述べた。

つづいて、調査の概要や経過を述べたうえで、「習慣的な発話・行為」「発話を中心とした相互作用」「行為を中心とした相互作用」「探究」の4つの切り口から、子どもたちの音楽学習における多面的な知識の動態について検討した。授業観察でみられた具体的なエピソードをトランスクリプトに示し、それを解釈的に分析している。

調査を通じて、多面的な7タイプの音楽の知識について、以下のことが明らかにされた。

◆経験的な音楽の知識

経験的な音楽の知識は、他の類型の音楽の知識の源泉、いわばデータベースとしての機能をもっている。「具体的な経験を通じてのみ獲得される」「実践に関する共通感覚」であり、子どもたちの習慣的な行為や習慣的な発話もこの知識の暗黙裡の使用によってなされていると考えられた。デューイのいう習慣の原理は、この経験的な音楽の知識のはたらきである。

子どもたちはそれぞれに、自らが積み重ねた音楽の実践経験をもとに、この知識を構築してきている。それは彼らにとってデータベース、準拠枠としてのはたらきをもっている。自らの演奏・歌唱や、聴取している楽曲の響きが、自らの経験的な音楽の知識の範疇にある場合には、子どもたちは取り立てて違和感をおぼえることはない。しかし、その範疇から外れた音の響き等に出会った場合には、違和感や驚きとして直観的な音楽の知識のはたらき、時にそれが言語化される。言語的な音楽の知識が発現すると、相互作用のフェーズが始まっていく。

◆言語的な音楽の知識

子どもたちの発話はすべて、言語的な音楽の知識が発現といえるものである。発話することによって、1人の子どもの音楽の知識—例えば楽曲に対する直観や解釈等—は、他者と共有される。言語的な音楽の知識は、音楽実践における相互作用のハブといえるものである。

ただし、子どもたちの発話を具にみてもと、発話が子どもの自発的なものである場合と、教師のはたらきかけに答えてなされたものである場合とによって、発話のスタイルと内容に違いが生じていることが明らかとなった。発話の契機によって、言語的な音楽の知識の何がどのように使用されるかが異なってくるのである。

i)子どもの自発的な発話において

子どもの自発的な発話を契機として相互作用が展開していく場合、オノマトペや感情語、比喩等の言語的な音楽の知識がもちいられていた。子どもたちはこれらの発話によって、ある楽曲やその演奏のどのような質的な面に注目したのかを共有する。次々に違和感や驚きを発話することで、自分たちの楽曲に対する興味・関心を焦点化し、何が自分たちにとっての問題であるかを明確にし、共有していく。

ii)教諭のはたらきかけが契機となっている発話において

教諭のはたらきかけを契機として発話が展開していく場合には、子どもたちはフォーマルなスタイル

の発話をおこない、その内容は音楽的概念に言及する比較的分析的なものが多かった。ただしこうした場合において、音楽的概念の名辞はもちいられない。述語や修飾語のかたちで言及がなされていた。

iii)探究における音楽的概念の使用

探究のプロセスが展開する場合には、子どもたちの発話に「フラット」「短調」といった音楽的概念の名辞がともなっていた。子どもたちは、楽曲に対する違和感の要因を模索し、推理する中で、意味がわからないままに音楽的概念の名辞を発話し、それを共有し、行動を通じた検証をおこなう。それを通じて、彼らにとってのあたらしい「保証づきの言明」すなわち知識を共同的に創出していた。

エリオットの論において音楽的概念は、教科書型の知識であり、副次的に扱われるべきものとされた。しかしながら、子どもたちの探究を具にみていくと、けっしてそれだけにとどまらない道具的な機能を音楽的概念の名辞は持っていることが伺えた。

◆行動的な音楽の知識

音楽実践をその共同体に集う成員の相互作用であるととらえると、潜在的にある経験的な音楽の知識が可視化されずに主体のうちで働いている場合と、行為として発現し可視化されたときとでは、道具的機能の質が変容している点で大きな相異があることになる。そこでエリオットのいう経験的な音楽の思考・知と、手続き的な音楽の思考・知のうちで、他者や自身から見て可視的に行動としてあらわれる知識を、本研究で「行動的な音楽の知識」としてあらたに措定した。これは言語的な音楽の知識とならび、相互作用のハブとなる知識である。

個人のなかで潜在的に機能している経験的な音楽の知識が、行為として発現し他者や自身から可視化されることで、さらに相互作用のハブとしての機能をもつようになっていた。また、行動的な音楽の知識は、可視的になることによって他者に使用されるだけでなく、知識の主体自身にも道具的に使用されうることが見出された。

◆直観的な音楽の知識

子どもたちは経験的な音楽の知識を基底的に使用しながら実践に参加しており、ここではデューイのいう「習慣の原理」が機能しているといえる。しかしそうしたなかで、なんらかの違和感や驚きをおぼえる場合がある。その違和感や驚きが、直観的な音楽の知識である。その違和感には、新奇性のある響き、予期していた展開と違っていたというズレ、技巧的な演奏表現に対する驚き等、さまざまなものが含まれる。デューイが探究の理論で述べた「抵抗」はこれにあたる。直観的な音楽の知識は、時に言語的な音楽の知識として発現する。

直観的な音楽の知識が顕在化することで、習慣のはたらきが寸断され、探究の第1フェーズである「不確定な状況」が立ちあがる。相互作用や探究の契機として重要な機能をもつ音楽の知識であるといえる。

◆倫理的な音楽の知識

エリオットは倫理的な音楽の知識を、善いこと(the good)のために自らの音楽的な能力をもちいようとする傾向と関わっていると述べた。とりわけ教育の文脈ではそれが問題となることを彼は指摘している。具体例としては、ある楽曲を取り巻く社会問題や歴史的な背景をふまえてよりよい音楽表現を考えるといったことが挙げられている。

しかし、ある行為に際して何が善いことなのか、どうすべきなのかということは、楽曲そのもののコンテキストから判断されるだけではない。小学校音楽科授業の観察からは、授業という実践のコミュニティを取り巻くコンテキストから倫理的な音楽の知識が醸成されていることがうかがえた。すなわち、

授業のある場面で、どのような内容の発話や行為をどのようなスタイルで行うことが望ましいかということが、楽曲よりも学習活動を取り巻くコンテキストによって規定されるということである。そのような倫理的な音楽の知識は、子どもたちの発話内容をゆるやかに規定していた。

◆価値発見的な知識

エリオットは価値発見的な思考・知について、ある実践下で、そこにある課題を障害としてではなく可能性として見なすことにより、それを克服する力(ability)のことでありと説明した。それがはたらいているときには、創造性が発揮されるという。オリジナルな視点をもって、リスクを厭わずに実践のあらたな方向性を探っていき、場合によってはあらたな価値や意味の創造をしていくという知識である。

マイクロ・エスノグラフィを通じて、価値発見的な知識によって、子どもたちの探究が推進していくと示唆された。特に「推理」以降のフェーズでの子どもたちの発話と行為には、価値発見的な音楽の知識がはたらいていたと考えられる。

価値発見的な知識がはたらくことによって、子どもたちは単なる相互作用から一歩踏み出し、不確定な状況から収集された事実を組み合わせることで仮説を形成したり、仮説を行動を通して検証したりするフェーズへ進みだす。そして、自分達なりのあたらしい知識を生成していくことができる。

◆メタ認知的な音楽の知識

エリオットはメタ認知的な音楽の思考・知について、「音楽実践の中で行為しながら自らのそれをモニターし、調節し、バランスを取りつつ、周囲の状況ともすりあわせながら各種の音楽の思考・知についてメタ認知的に思考や知をはたらかせること」と説明した。

授業の観察において、このタイプの知識は、他の子どもの行為を参照し、そこにある自分とのズレを見出す、つまり直観的な音楽の知識の作動を契機としてはたらいていた。他者に分かりやすいように自らの行為をモニターし、動作を調整するというかたちで、このタイプの知識が使用されていた。子どもたちは、他者の行為をリソースとして自分の行為を省み、修正し、あらたな行為に変えて他者へとはたらきかけていくのである。

終章 本研究の総括と今後の課題

終章では、各章で見出された成果を振り返って総括した。また、成果と今後の課題について述べた。

本研究の成果は以下である。デューイは音楽教育学の分野において比較的頻繁に参照される存在である。しかし彼の知識論や学習論を詳細に検討し、それと音楽における知識の適合性について検討した研究はこれまでにみられなかった。この点で、第Ⅰ章・第Ⅱ章で展開した検討には一定の意義があるものと考えられる。またデューイの学習論や状況的学習論を援用した音楽教育学分野の先行研究における課題である、探究の理論の6フェーズの曖昧さ、実践の複雑性や文脈等の捨象といった点を克服し、マイクロ・エスノグラフィの手法による調査をおこなえた点も成果として挙げられる。第Ⅲ章においては、これまで同一視されることの多かったスモールとエリオットのミュージッキング論の異同を明らかにできた。これについても本研究の成果であると考えられる。日本において初めて、2者の相違点や、スモールによるエリオットへの揶揄ともとれる言及を学術論文のなかで明らかにし、記述することができた。

本研究におけるもっとも大きな成果は、第Ⅳ章から第Ⅵ章にかけて、エリオットによる音楽における知識論を敷衍し、音楽学習における多元的な知識の動態の一端を明らかにできたことである。実際の音楽学習の現場において、子どもたちが多元的な知識をどのようにもちい、相互作用をし、あらたな知識

をつくりだしているのか、異なるタイプの知識がどのように関連しているのかについて描きだすことができた。

今後の課題としては、技能の向上の過程を明らかにすること、子どもたちの発話や行為にあらわれる、替えうたをはじめとするユーモアの意味と機能を検討すること、音楽の知識の使用や創出が、学習者の発達段階によってどのように異なるのかを明らかにすることが挙げられる。

V. 引用文献

i. 和文文献

アラン, O.、永富正之他訳(1969)『和声の歴史』白水社

有元典文(2013)「巻頭言 学習という観察」『認知科学』20 卷 3 号、日本認知科学会、pp.281-282

秋田喜代美(2000)『子どもをくむ授業づくり—知の創造へ…』岩波書店

石桁真礼生他著(1998)『楽典—理論と実習』音楽之友社

伊藤邦武(2016)『プラグマティズム入門』ちくま新書

岩佐明子他(2015)「保育者養成校における音楽教育についての調査研究 —音楽基礎知識及び鍵盤楽器の練習量と演奏技術の観点から—」『京都文教短期大学研究紀要』第 53 集、京都文教短期大学、pp.21-30

上野千鶴子編(2001)『構築主義とは何か』勁草書房

上野直樹他編著(2006)『文化と状況的学習 実践、言語、人工物へのアクセスのデザイン』にほんごの凡人社

魚津郁夫(1978)『世界の思想家 20 デューイ』平凡社

小澤照彦(1994)「デューイのカント批判—自然科学の方法の解釈—」『高知大学学術研究報告』第 43 卷、高知大学、pp.173-190

小田博志(2010)『エスノグラフィー入門 〈現場〉を質的研究する』春秋社

海保博之監修(2008)『朝倉心理学講座 11 文化心理学』朝倉書店

香川秀太・茂呂雄二(2003)「学校活動に関する学習論の検討 —認知の状況性、学校の自己収束性、LPP、そして移動の概念から—」『筑波心理学研究』26 号、筑波大学、pp.53-73

兼平佳枝(2011)「芸術的探究としての音楽創作授業における子どもの問題解決過程に関する教育実践学的研究—デューイの探究理論を手がかりに—」『学校音楽実践研究』第 15 号、日本学校音楽実践学会、pp.25-37

荏宿俊文他編(2012)『ワークショップと学び 1 まなびを学ぶ』東京大学出版会

菊池暁編(2005)『身体論のすすめ』丸善株式会社

岸政彦他(2016)『質的社会調査の方法—他者の合理性の理解社会学』有斐閣

ギアーツ, C.、吉田禎吾他訳(1987)『文化の解釈学 I』岩波書店

クワイン, W. V. O.、飯田隆訳(1992)『論理的観点から—論理と哲学をめぐる九章』勁草書房

小島律子(2009)「芸術的経験における探究としての問題解決の特性」『日本デューイ学会紀要』日本デューイ学会、pp.11-20.

コール, M.、天野清訳(2002)『文化心理学—発達・認知・活動への文化-歴史的アプローチ』新曜社

斉藤百合子(2005)「表現活動におけるコミュニケーションの様相 —デューイのコミュニケーション論に

- おける「意味の共有過程」に着目して一『日本デューイ学会紀要』46号、日本デューイ学会、pp.47-54
- 佐伯胖(1987)『岩波講座 教育の方法〈8〉からだと教育』岩波書店
- 櫻井茂男他編(2013)『新教職教育講座第7巻 発達と学習』協同出版
- 佐々木俊介(1993)「デューイの学習論の再考察」『教育学研究』60巻3号、日本教育学会、pp.248-255
- 佐藤郁哉(1984)『暴走族のエスノグラフィー—モードの叛乱と文化の呪縛』新曜社
- 佐藤郁哉(2006)『ワードマップ フィールドワーク 増訂版 書を持って街へ出よう』新曜社
- 佐藤学(1996)「実践的探究としての教育学—技術的合理性に対する批判の系譜—」『教育学研究』第63巻第3号、日本教育学会、pp.278-285
- 佐藤学(1997)『学びの身体技法』太郎次郎社
- 佐藤学(1999)『学びの快樂—ダイアログへ—』世織書房
- シェフラー, I.、村井実監訳(1987)『教育から見た知識の条件』東洋館出版社
- 柴山真琴(2001)『行為と発話形成のエスノグラフィー —留学生家族の子どもは保育園でどう育つのか』東京大学出版会
- 清水宏吉編著(1998)『教育のエスノグラフィー —学校現場のいま—』嵯峨野書院
- ショーン, D.、柳沢昌一他訳(2007)『省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房
- 城間祥子・茂呂雄二(2007)「中学校における専門家とのコラボレーションによる和楽器授業の展開過程—「参加としての学習」の観点から—」『教育心理学研究』55巻、日本教育心理学会、pp.120-134
- 新山王政和他(2013)「表現と鑑賞を一体化させ音や音楽を聴く力の育成をめざした授業実践-2—音楽構成要素を知覚・分析させ表現へ結びつけさせた試み—」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』vol.3、愛知教育大学、pp.87-96
- ジェイムズ, W.、榊田啓三郎訳(2010)『プラグマティズム』岩波文庫
- ジョンソン, M.、菅野 盾樹他訳(2001)『心のなかの身体—想像力へのパラダイム変換』紀伊国屋書店
- 杉浦宏編(2003)『現代デューイ思想の再評価』世界思想社
- 杉田政夫(2018)「音楽教育哲学における「社会正義」論の地平 —ポストコロニアル批評、脱構築、リベラリズムに基づく議論の諸相—」『音楽教育学』第48巻1号、日本音楽教育学会、pp.13-24
- スタンバーグ, R. J.、小此木啓吾他訳(1998)『知脳革命 ストレスを超え 実りある人生へ』潮出版社
- スモール, C.、野澤豊一他訳(2011)『ミュージッキング 音楽は〈行為〉である』水声社
- 千成俊夫(1973)「音楽科における目標設定の基本原則」『京都教育大学教育研究所所報』第19号、京都教育大学、pp.194-195
- 千成俊夫(1975)「音楽の授業成立に関する一考察」『北海道大学教育学部紀要』第25号(砂沢喜代次教授退官記念号)、北海道大学、pp.91-203
- 千成俊夫・宇田昌子(1981)「音楽教育の教育課程構成にかんする若干の問題(4)」『広島大学教育学部紀要 第二部』第30号、広島大学、pp.159-168
- 千成俊夫(1983)「音楽教育の教育課程構成にかんする若干の問題(5)」『広島大学教育学部紀要 第二部』第31号、広島大学、pp.159-168
- ソーヤー, R. K.、大島純他監訳(2016)『学習科学ハンドブック[第二版] 効果的な学びを促進する実践/共に学ぶ』北大路書房

- 高須一(2007)「特集Ⅱ知識や技能を習得し、活用、探究する学習指導の工夫 音楽 知識や技能を習得し、活用、探究する音楽科の学習指導の工夫」文部科学省教育課程課/幼児教育課編『初等教育資料』No.825 平成 19 年 9 月号、東洋館出版社、pp.40-51
- 高橋佳子(1996)「デューイにおける意味生成としてのコミュニケーション事象」『教育方法学研究』第 22 卷、日本教育方法学会、pp.41-48
- 滝沢ほだか・松田稔樹(2012)「音感に頼らず知識を活用した音づくりを学ぶための BGM 制作教材の開発」『日本教育工学会研究報告集』2012 年 1 号、日本教育工学会、pp.199-206
- 谷口忠顕(1991)『デューイの知識論』九州大学出版会
- チザム, R. M.、上枝美典訳(2003)『知識の理論 第 3 版』世界思想社
- ダイキューゼン, G.、三浦典郎ほか訳(1977)『ジョン・デューイの生涯と思想』清水弘文堂
- デカルト, R.、谷川多佳子訳(1997)『方法序説』岩波文庫
- デューイ, J.、宮原誠一訳(1957)『学校と社会』岩波文庫
- デューイ, J.、松野安男訳(1975)『民主主義と教育』岩波文庫
- デューイ, J.、河村望訳(1996)『デューイ=ミード著作集 5 確実性の探求』人間の科学社
- デューイ, J.、河村望訳(1997)『デューイ=ミード著作集 4 経験と自然』人間の科学社
- デューイ, J.、河村望訳(2003)『デューイ=ミード著作集 12 経験としての芸術』人間の科学社
- デューイ, J.、河村望訳(2013)『行動の論理学—探求の理論』人間の科学新社
- デューイ, J.、河村望訳(2017)『デューイ=ミード著作集 3 人間性と行為』人間の科学
- 戸田山和久(2002)『知識の哲学』産業図書
- 中野啓朗(1998)「デューイにおける「第一次的経験」と「第二次的経験」の関係に関する一考察 —学習論の観点から—」『日本デューイ学会紀要』39 号、pp.12-17
- 中原淳(2006)『企業内人材育成入門 人を育てる心理・教育学の基本理論を学ぶ』ダイヤモンド社
- 中村美亜(2010)「〈音楽する〉とはどういうことか?—多文化社会における音楽文化の意義を考えるための予備的考察」『東京藝術大学音楽学部紀要』36 号、東京藝術大学音楽学部、pp.161-178
- 日本音楽教育学会編(2004)『日本音楽教育事典』音楽之友社
- ノディングス, N.、宮寺晃夫監訳(2006)『教育の哲学 —ソクラテスから〈ケアリング〉まで』世界思想社
- 野中郁次郎・竹内弘高(1996)『知識創造企業』東洋経済新報社
- パース, C. S.他、植木豊訳(2014)『プラグマティズム古典集成』作品社
- 火物憲二・石上靖芳(2016)「小学校国語科授業における主体的な学びを実現する談話ルールの検討」『静岡大学教育学部研究報告 人文・社会・自然科学篇』第 66 号、静岡大学教育学部、pp.121-134
- 広石英記(2005)「ワークショップの学び論—社会構成主義からみた参加型学習の持つ意義」『教育方法学研究』第 31 卷、日本教育方法学会、pp.1-11
- 廣松渉編著(1998)『岩波哲学・思想事典』岩波書店
- 福島真人(2009)「知識移転の神話と現実—バイオ系ラボでの観察から—(<特集>知識伝承システムの多様な次元)」『研究 技術 計画』24 卷 2 号、研究・イノベーション学会、pp. 163-171
- 福島真人(2010)『学習の生態学 リスク・実験・高信頼性』東京大学出版会
- 藤田由美子(2015)『質的社会研究シリーズ 8 子どものジェンダー構築 幼稚 4 園・保育園のエスノグラ

- フィ』ハーベスト社
- ブラッキング, J.、徳丸吉彦訳(1978)『人間の音楽性』岩波書店
- 平凡社哲学事典編集部(1971)『哲学辞典』平凡社
- ポランニー, M.、高橋勇夫訳(2003)『暗黙知の次元』ちくま学芸文庫
- 松尾剛・丸野俊一(2007)「子どもが主体的に考え、学び合う授業を熟練教師はいかに実現しているか—話し合いを支えるグラウンド・ルールの共有過程の分析を通じて—」『教育心理学研究』第 55 号、日本教育心理学会、pp.93-105
- マーフィー, J.、ローティ, R.、高頭直樹訳(2014)『プラグマティズム入門：パースからデイヴィドソンまで』勁草書房
- 光成研一郎(2000)「デューイの探究(反省的経験)の教育的意義について —思考力養成の観点から—」『人文研究』50 卷 1 号、関西学院大学、pp.44-55
- 三橋さゆり(2014)「児童の歌唱表現における問題の発見と共有 —グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく歌唱活動の分析を通して—」『音楽教育学』第 44 卷第 2 号、日本音楽教育学会、pp.1-12
- 水戸博道(2002)「音楽的知識と技能の獲得」『宮城教育大学紀要』第 37 卷、宮城教育大学、pp.83-88
- 箕浦康子(1999)『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房
- 箕浦康子編(2009)『フィールドワークの技法と実際〈2〉分析・解釈編』ミネルヴァ書房
- 宮崎宏志(1999)「ジョン・デューイの探究の理論における知識の獲得と拡充」『アメリカ教育学会紀要』第 10 号、アメリカ教育学会、pp.20-29
- 村尾忠廣(1997)「音楽教育の〈実践〉をめぐる三つの論争—今、世界でおこなわれている対立の構図をサーヴェイする」『音楽教育学』第 27-1 号、日本音楽教育学会、pp.1-12
- 森際康友編(1996)『知識という環境』名古屋大学出版会
- 茂呂雄二(1991)「教室談話の構造」『日本語学』10 卷 10 号、明治書院、pp.63-72
- 茂呂雄二編著(1997)『対話と知—談話の認知科学入門』新曜社
- 茂呂雄二編(2001)『状況論的アプローチ 3—実践のエスノグラフィ』金子書房
- 茂呂雄二他(2012)『状況と活動の心理学—コンセプト・方法・実践』新曜社
- 八木正一(1994)「音楽科における教育内容論の総括と課題」『広島大学教育学部教科教育学科音楽教育学教室論集』VI、広島大学教育学部、pp.5-15
- 八木正一(2007)「音楽科における教材概念の検討と授業の構成」『教材学研究』第 18 号、日本教材学会、pp.43-49
- 八木正一・川村有美(2007)「学習活動と授業構成に関する—考察—活動主義批判の検討を中心に—」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第 4 号、埼玉大学教育学部、pp.57-67
- 山田陽一編(2008)『音楽する身体—〈わたし〉へと広がる響き』昭和堂
- やまだようこ編(2007)『質的心理学の方法』新曜社
- 山中文(2017)『音楽科における教育内容論の成立と展開に関する研究—授業構成の方法との関連を視野に入れて—』風間書房
- リーマー, B.、丸山忠璋訳(1987)『音楽教育の哲学』音楽之友社
- レイヴ, J.他、佐伯胖訳(1993)『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書

レイヴ, J.、無藤隆他訳(1995)『日常生活の認知行動—人は日常生活でどう計算し、実践するか—』新曜社

ローティ, R.、室井尚他訳(2014)『プラグマティズムの帰結』ちくま学芸文庫

渡邊厚美(2008)「音楽行動における表現の根底にあるもの—一年生児童の音楽行動に基づいて」『音楽学習研究』第4号、音楽学習学会、pp.19-27

ii. 英文文献

- Allsup, Randall (2016) *Remixing the Classroom: Toward an Open Philosophy of Music Education*. Bloomington: Indiana University Press.
- Blacking, John (1974) *How Musical Is the Man ?* Seattle and London: University of Washington Press.
- Buchler, Justus (1995) *Philosophical Writings of Peirce*. New York: Dover Publications, Inc.
- Cazden, Courtney B. (2001) *Classroom Discourse: The Language of Teaching and Learning 2nd Edition*. Portsmouth: Heinemann.
- Cohen, Mary L. (2000) *Christopher Small's Concept of Musicking: Toward a Theory of Choral Singing Pedagogy in Prison Contexts*. Kansas City: University of Kansas.
- Corsaro, William A. (1997) *The sociology of childhood*. Thousand Oaks, CA.: Pine Forge Press.
- Dewey, John (2013, originally 1899) *The School and Society*. Los Angeles: Hardpress Publishing.
- Dewey, John (2012, originally 1910) *How we think Revised edition*. Washinton D.C.: Dover Publications.
- Dewey, John (1980, originally 1934) *Art as Experience*. New York: Perigee Books.
- Dewey, John (1986 originally 1938) *The later Works, 1925-1953 Volume 12: 1938 Logic: Theory of Inquiry*. Carbondale: Southern illinois University Press.
- Dewey, John (2008, originally 1949) *Dewey's Reply to Albert G. A. Balz, Later Works 16, 1925 - 1953: 1949 - 1952, Essays, Typescripts, and Knowing and the Known*. Carbondale: Southern Illinois University Press.
- Dewey, John (2008, originally 1980) *The Later Works, 1925-1953 JOHN DEWEY Volume 12: 1938 Logic: The Theory of Inquiry*. Carbondale: Southern Illinois University Press.
- Elliott, David J. (1995) *Music Matters*. New York: Oxford University Press.
- Elliott, David J. and Marissa Silverman (2015) *Music Matters 2nd edition*. New York: Oxford University Press.
- Gaskins, S., Miller, P. J., and Corsaro, A. A. (1992) "Theoretical and methodological perspectives in the interpretive study of children.", *Interpretive approaches to children's socialization, New directions for child development, No.58*. San Francisco: Jossey-Bass, pp.5-23.
- Hook, Sidney (1971) *John Dewey: An Intellectual Portrait*. Westport: Greenwood Press.
- Howard, Vernon A. (1992) *Learning by All Means: Lessons From Arts*. New York: Peter Lang Publishing Inc.
- Johnson, Mark (1987) *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*.

- Chicago: University of Chicago Press.
- Noddings, Nel (1995) *Philosophy of education Dimensions of philosophy series*. Boulder, Colo.: Westview Press.
- Peirce, Charles Sanders (1905, reprinted in 2015) “*What Pragmatism is*” *The Monist, vol.15, Issue 2, April 1905*. Oxford: Oxford University Press.
- Peirce, Charles Sanders (1877, republished in 2011) “*The Fixation of Belief*” *Kindle Edition*. Mobile Lyceum.
- Reimer, Bennett (1970) *A Philosophy of Music Education*. Englewood Cliffs N.J.: Prentice-Hall, Inc.
- Scheffler, Israel (1978) *Conditions of Knowledge: An Introduction to Epistemology and Education*. Chicago: University of Chicago Press.
- Schon, Donald A. (1983) *The Reflective Practitioner. How Professionals Think in Action*. New York: Basic Books.
- Small, Christopher (1987) *Music of the Common Tongue : Survival and Celebration in African American Music*. Middletown: Wesleyan University Press.
- Small, Christopher (1998) *Musicking: Meaning of Performing and Listening (Music Culture)*. Middletown, Connecticut: Wesleyan Univ Press.
- Woodford, Paul G. (2005) *Democracy and Music Education: Liberalism, Ethics, and the Politics of Practice*. Bloomington: Indiana University Press.

iii. 筆者による刊行済みのおもな関連論文

- 森薫(2009)「和音・和声を扱う教材のありかたについての一考察 ～音楽科に求められる能力と、「水平的な構造を持つ授業」の考えかたに着目して～」『教材学研究』第20巻、日本教材学会、pp.23-30
- 森薫(2009)「「音楽的概念」に関する論争の再検討 ～ジョン・デューイの美的経験論を手がかりとして」『音楽学習研究』第5号、音楽学習学会、pp.20-28
- 森薫(2010)「「音楽的概念」に関する一考察 ～「美的教育としての音楽教育」の理念と方法論の検討を通じて～」『教材学研究』第21巻、日本教材学会、pp.77-86
- 森薫(2016)「子どもの自発的なうたに関する検討 —小学校音楽科の授業観察を通じて—」『未来の保育と教育—東京未来大学実習サポートセンター紀要—』第3号、東京未来大学、pp.45-52